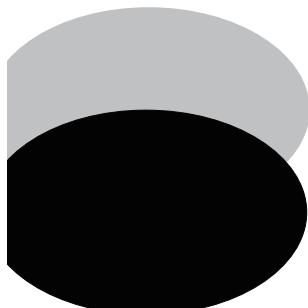


20181130

絵本学会 NEWS No.62

発行: 絵本学会
発行日: 2018年11月30日
編集: 絵本学会広報委員会
絵本学会事務局: 〒448-0852 愛知県刈谷市住吉町4-5
刈谷市美術館内 絵本学会事務局
E-mail: office@ehongakkai.com
http://www.ehongakkai.com



第22回絵本学会大会について
第21回絵本学会大会報告
企画委員会からの報告
研究助成についての報告
絵本学会Who's who
新入会員紹介
理事会議事録

絵本学会

■第22回 絵本学会大会（2019年度）のお知らせ■

第22回絵本学会大会は2019年6月1日(土)、2日(日)に帝京大学八王子キャンパスで開催されることになりました。
研究発表、作品発表を希望される会員は、以下の要項を参照してお申し込みください。

第22回 絵本学会大会 研究発表募集要項

1. 発表者の資格(応募資格)
絵本学会の会員で、2018年度までの会費を納入済みであること。
新規入会者の場合は、2019年1月20日(日)の時点で入会手続きが完了していること。
2. 発表テーマ
絵本及び絵本に関連する研究テーマで未発表のもの。
3. 発表時間
発表20分間 質疑応答10分間
4. 申し込み要領
①発表テーマ、②発表者の氏名・住所・電話番号/FAX番号・メールアドレス、
③所属機関名・職業など、④発表要旨(800字程度/大会プログラム用原稿)、
⑤発表時に使用する機材(パソコン、PCプロジェクター、書画カメラ等)
以上の①～⑤について、文書化したものを絵本学会事務局宛に郵送またはメールでお届けください。
5. 申し込み期間
2019年2月1日(金)～2月24日(日)(期間内に必着)
6. 発表者の決定
研究発表は、発表申込者多数の場合、発表要旨に基づいて審査する場合があります。発表順・時間等は、3月24日(日)までにお知らせします。
* 受理した原稿等は返却しませんので、必ず控えをとってください。

第22回 絵本学会大会 作品発表募集要項

- 大会会場に会員の作品を展示し、会期中の所定の時間(大会2日目に実施予定)に出品者自らが制作趣旨を口頭で発表していただくことを条件とします。
1. 発表者の資格(応募資格)
研究発表と同じ
 2. 発表作品
未発表の絵本(個人制作、共同制作ともに可)
 3. 発表形態
判型・サイズ・ページ数などは自由。原画を原寸でカラーコピーしたシートの全画面と、カラーコピーなどで製本したものを1冊出品すること。
 4. 申し込み要領
①作品タイトル、②発表者の氏名・住所・電話番号/FAX番号・メールアドレス、
③所属機関名・職業など、④原画サイズ・枚数、⑤作品紹介原稿(200字程度)
以上の①～⑤について、文書化したものを絵本学会事務局宛に郵送またはメールでお届けください。
 5. 申し込み期間
2019年2月1日(金)～2月24日(日)(期間内に必着)
 6. 発表者の決定
作品発表は、発表申込者多数の場合、作品紹介要旨に基づいて審査する場合があります。作品搬入の期日・方法、発表順・時間等については、3月24日(日)までにお知らせします。これらの詳細は第22回絵本学会大会実行委員会より連絡します。

【研究発表・作品発表の申し込み】

〒448-0852 愛知県刈谷市住吉町4-5 刈谷市美術館内 絵本学会事務局
FAX:0566-26-0511 E-mail: office@ehongakkai.com

* 発表内容と当日の記録写真は、絵本学会NEWSおよびホームページを通じて公開されることがありますので了承ください。

第21回 絵本学会大会(6月2・3日)報告

2018年6月2日(土)、3日(日)、北海道札幌市にある札幌大谷大学短期大学部において、第21回絵本学会大会が開催されました。毎年多量の絵本が出版される今日、絵本の送り手である作家や出版社、受け取る側の読者、そして研究者、その表現方法、目的のそれぞれが多種多様になってきていると思われることから今回のテーマを「多様化する絵本」としました。参加者は会員106名、一般参加者87名、学生21名、総数214名でした。6月2日(土)、基調講演は旭川市在住のあべ弘士氏にお願いしました。テーマは「地球は動物がいっぱい—絵本ができるまで」です。あべ氏は動物園の飼育係として長く働いた経験の持ち主であることはもう十分に知られていますが、絵本作家として旭川市において地域興し、活性化にも力を注いでおられます。また、布絵本が札幌発祥あることをご存知ない方もおられるのではないかでしょうか。ミニ講演として、初の布絵本製作図書館である「ふきのとう文庫」の代表理事、高倉嗣昌氏にその設立についてお話しいただきました。また多くの布絵本作品、弱視の人のための拡大絵本の展示を行ってくれました。

今回の研究発表は36本、絵本作品発表が4本、座組に苦労するほどの数であり、絵本研究の裾が広がっていることを感じます。時間の関係から2日は5室、3日も4室に分かれることになり、聴きたい発表が聞けないということがあったと思いますが、うれしい悲鳴だったと思います。3日の午後は3つのラウンドテーブルを行いました。A:「保育現場より～保育の中で広がる絵本のいろいろ」保育者養成に関わる先生たちによるものであり、札幌市内の保育園にも協力をお願いし、絵本による実践を見せていただき、大変好評でした。B:「いわさきちひろと武市八十雄の絵本づくり」いわさきちひろ生誕100年であることから松本会長、さらに武市八十雄のご次男である晴樹氏に加わっていただき、ちひろと八十雄の交流など貴重なお話を聞くことが出来ました。C:「ようこそ自然へ！絵本画家が語る実体験としての自然」自然派のあべ弘士氏、村上康成氏に熱く語りあっていただきました。どれも部屋が満員になるほどの盛況であり、最後まで充実した時間となったようです。

会場の大学が耐震工事の最中であったため、ご不自由をお掛けした点があったと思いますが、ご容赦いただきたいと思います。一方、大学の協力は大変ありがとうございます。10年前、第11回大会を札幌市で行っていますが、いろいろな点で違いが出てきたことを感じました。一番違うところは研究発表の数が10年前14本だったところが36本だったことです。それ以外にも、郵便での振り込み口座の開設が大変に難しくなっていましたこと、また使用する施設、機器の確保、手伝ってくれる学生たちへの対応など、今後大会を開催していくにあたって変わいかなければならぬこと、考慮していかなければならぬことがありますことを報告したいと思います。

(文責:杉浦篤子)

第1日目 6月2日(土)13:00～14:30

基調講演 「地球は動物がいっぱい—絵本ができるまで」

講師:あべ弘士氏

こんなちはよく遠いところまでいらっしゃいました。今が一番いい

北海道です。旭川というところは、札幌から車で1時間半北にあって、北緯44度。冬は11月1日から4月30日まで雪ですね。ひと冬に8～10mくらい降ります。その雪が融けるのが4月末。今は6月。皆さんは北海道にいらして「きれいな緑だな」と思われるでしょうけれど、今まで真っ白だった世界がだんだん緑になっていくというのは、とても美しいです。今日この頃の緑は新緑からちょっと濃い緑になってきた、という感じです。

旭山動物園の飼育係時代

まず、動物の話をします。旭山動物園の飼育係になって最初に担当したのはハトとヤギとアヒルとガチョウ。オオカミの飼育に憧れて動物園に入ったのに、アヒルとガチョウでした。そのうち3年くらいしてからサルの係になりました。サルはものすごく人を見る。人の心理をはかるという感じ。サルの担当になったとき、先輩から言われたのはサルと目を合わせるな、ということ。サルは眼で勝負する。だからサルに負けないくらいの眼力を飼育係がもてばいいのだけれど、目をそらすと負けます。順位が下がる。それからサルの前で転ぶなどと言われた。サルの前で転ぶと、「アソブ、たいしたことない」と見下されて、順位が下がる。

それから爬虫類を担当しました。ミシシッピー・アリゲーターという、大きな大きなワニがいました。エサは生肉。食べられるくらいの塊にしてあげます。ワニは同じ歯がずらつと並んでいて捕まえるのは強力なんだけれど、噛みちぎることができない。ですから丸のみです。野生のワニは、シマウマを食べる。どうやって食べるかというと、ナイルのアリゲーター、これがとてもデカいのですが、シマウマが水を飲んでいるところにスープと水の中から近づくと、シマウマの足をガブッと噛む。頭をガブッと噛む。そしてシマウマを水の中に引きずり込むんです。そしてシマウマの体をグルグルグルッと回転させる。そのうちにブチッとねじ切れちゃう。そしてカッカッカッと丸呑みにする。こわいですね。わたしが初めてワニの係になったとき、先輩がこういうアドバイスをくれました。「もし、ワニに噛まれたら、同じ方向に回転せよ」と。動物園というところは、いかに絵本の材料があるか。爬虫類の後は、色々な動物を担当しました。

3～4日前、札幌の円山動物園でチンパンジーが2頭逃げだしました。動物園の脱走事件は、全部カギのかけ忘れ。わたしの責任で動物を逃がしたことは5～6件ある。大きなフクロウを逃がしたんですよ。フクロウ舎のなかに入って掃除していると、大きなフクロウがドアのところをおしりでつづいて。そうすると、ぱろっととれちゃった。ドアがギーッとあいて、フクロウがトットツツ、ふわあっと浮いて、ふわふわあっと飛んで逃げちゃった。フクロウが園内の上空を飛んでいると、すごいです。あつという間に山のカラスがぶわーっと200羽くらいくるわけ。そしてフクロウの上をカーカーカー、うずまいて飛ぶ。フクロウがカラスに追われるんです。有名な民話で「フクロウの染物屋」ってあるでしょ。あれ、カラスが追っかけてるでしょ。きっと作者は自然界のそういうことから考えたのでしょうね。それから逃げたフクロウが疲れて木の上に止まったの。それでわたしが木に登ってパッと捕まえようとした。その寸前、フクロウのほうがわたしの手をガチッと捕まえた。すごい握力でガバッとやられて「イタタタタタ」。そうしたら先輩が「よくやった、離すな」って言うんです。わたしが捕まえたのではありません。捕まえられたのです。30分くらい4本の爪でやられて、腱鞘炎になりました。今でも後遺症がありますね。時々手が動かなくなる。だからわたし、原稿が遅れる(笑)。

飼育係から絵本作家へ

絵は小さい時から得意で、絵描きを目指して3年くらい独学で風景とか人物とかたくさん描いていました。でも、飼育係になったとたん、絵なんてどうでもいい。背中に「動物命」って書いて仕事していたほど、面白い仕事でした。ただ動物園では、ポスター描いたり、機関紙つくったり、ずいぶん絵を描きました。動物を触る、ウンコ掃除をする、ブラッシングする、死んだら解剖する、そういうふうに動物と接していましたので、身体で動物をおぼえてきた。それで、動物園での事件を題材にした絵本を何冊か描くようになりました。そのうち木村裕一さんの文章で『あらしのよる』の絵を描くことになった。あの文章をもらって読んでいくと、おもしろいなと思いました。しろうとてこんなこと書けるんだなと。ヤギとオオカミなんて相入れない。「いいなあ」と思いながら頭のなかで絵を描いて、最後の一文を読んだ後、絵ができました。オオカミは地球上で一番鼻の利く動物です。『あらしのよる』のように、鼻かぜひいたくらいで、すぐ近くにいるヤギがわからないわけがない。それからオオカミは夜行性動物。真っ暗闇でもヤギが見えないわけがない。ヤギも夜行性。だからふたりはお互いにわかっている。だけこの話は物語だから通用する。それから、たくさんたくさん、動物の絵本を描き始めました。

作品紹介

スライドを使って何冊か紹介したいと思います。まず『エゾオオカミ物語』。北海道のエゾオオカミは、今から100年くらい前に絶滅しました。明治になる前、北海道はアイヌの人たちの土地でした。明治になって、私たち日本人が入りだし牧畜を始めました。牧畜の馬をオオカミが狙うようになってからオオカミは害獣ということで、日本人は色々な手段で殺しまくって、だれもいなくなつた。射殺、毒殺です。そのことを作品に描いてみました。この絵本の風景は、わたしが住んでいるところです。100年前とほとんど変わりありません。アイヌの聖地です。今でもたくさんの保護法で守られています。それから動植物の移動禁止。人工物ゼロです。冬は空を見上げるとオジロワシ、オオワシ。今はわたしのアトリエのそばでは、キタキツネのお母さんが、毎日赤ちゃんにおっぱいを飲ませています。それからたくさんのキツツキ、エゾシカ。クマもいます。そういうところです。

次は『クマと少年』というタイトルの本です。アイヌの話をかきました。北海道の人間は、明治以降に渡ってきた移民です。わたしの家族の父方は福島県相馬市から石工の職人として渡ってきました。母方は津軽。住んだところは旭川です。旭川にはコタンという大きなアイヌの村があります。わたしはじいちゃんの家にしおりゅう行っていましたけど、アイヌの人がたくさんいました。必ずクマを飼っているんです。ヒグマです。これはアイヌにとって最高レベルの神さま。ヒグマは北半球では最強の動物です。アイヌの人たちの考え方では、動物はすべて神さま。アイヌの住んでいるアイヌモシリと神さまの住んでいるカムイモシリの世界があって、カムイモシリにも人間と同じ姿かたちをした神さまが住んでいる。毛皮を被っていて、少し時間がたつると完全なヒグマに変身して、アイヌの世界にやってくる。そ

のときに、自分の身体の肉と毛皮と胆のうをお土産にもってくる。そして、人間は大事にクマを神の世界に送り帰す、という考え方ですね。クマ狩りをするのは春先です。アイヌの人たちは母グマを殺すんですけど、クマ狩りとは言わず「神さまを迎えていく」と言います。そして子グマを連れて帰って、その子に対して大変丁重なおもてなしをして、自分たちの食べるごちそうよりもずっとおいしいものを食べさせます。おっぱいをまだ飲んでるので、だれか乳飲み子のいるお母さんにおっぱいをもらいます。子グマが1才か2才になると、今度は神の国に帰つてもらいます。そのとき、お祭りをします。たくさん歌い、踊り、ごちそうを食べてもらい、最初は花の矢で踊りながらクマを打つのですけれど、最後はトリカブトの毒矢で殺します。そして丁重に丁重に神の国に送る。それが日本人とは全く違う、アイヌの考え方です。まだアイヌの人たちは、自然に対する敬虔な哲学をもっています。それを絵本にしました。上川のアイヌのことを知っているということで、いつか描かなくちゃいけないと思いながら、手を出すのはやめようと思っていたのですが、どうとう手を出した。読んでみます。(読み聞かせ)

最後に宮沢賢治の『旭川』という絵本を紹介します。宮沢賢治は大正12年の8月2日、花巻の農業高校の先生をしていた当時、花巻から青森、そこから青函連絡船に乗つて、函館から小樽周りで札幌。そして旭川まで来ました。旭川には朝の5時に着いて、お昼の12時の汽車で稚内へ。そこから樺太まで行きました。理由はふたつあって、ひとつは教子の就職探しと北方農業の研究。もうひとつは最愛の妹トシさんが前の年に亡くなつたので、その感傷旅行の意味があつて、それで樺太まで行きます。その途中で旭川の街を散策して、「旭川」という一編の詩を書きました。不思議なタイトルですね。全部で28行の詩です。(詩の朗読)

わたしがこの詩を読んで、絵本にならないだろうかと挑戦し始めたのが8年前。でも、どうもうまくいかない。特に難しかつたのは、「無上菩提」という仏教の言葉です。仏さまが空にいてどうのこうのという言葉だろうと思うんですけど、これを絵本にどう表現できるか。難しいけれど、取り上げないわけにはいかない。宮沢賢治の言葉は大事にしたい。それで、空にいるのは鳥だということで、最初はヨタカを考えました。でも、ヨタカは空の上のほうには飛ばない。『ヨタカの星』は最後、太陽の光で焼き殺されるんだけど、ふつうは夕方、大きな口をあけながら、横に「キヨッキヨッキヨッ」といつて飛んで、ガヤトンボを食べる。だからヨタカはやめようと。ヒバリがいます。ヒバリは今、空高く飛んで鳴っています。ある程度の高さまで飛ぶと、そこからホバリングといって停止飛行。だからちょっと違います。オオジシギという鳥を見つけました。大きさはハトぐらい。そのオオジシギのディスプレイは、それは見事なものです。上昇、上昇、上昇して、もうだめだっていうまで、「チープチープチープ」という声をだしながら昇るんですよ。そうやって昇つて、今度は地上に落下するように急降下する。そのとき尾羽をパッと広げて、羽をふるわせながら、雷そっくりの声をだしながら落ちる。地面寸前のところまで落ちて、また上昇して、と非常に派手なディスプレイをする。だから「オオジシギにしよう」と決めて、6年目にできて、その2年後に絵本ができました。最後に紹介します。(読み聞かせ)

色々なかたちで絵本ができるがってきます。その一端を紹介したつもりです。時間がきたので終わります。

(文責:久保田知恵子)

第2日目 6月3日(日) 13:30~15:30

ラウンドテーブルA

「保育現場より～保育の中で広がる絵本のいろいろ」

企画説明 吉川 聰子(札幌国際大学短期大学部)
話題提供者 藤田 春義(札幌第一こどものとも社)
遠藤亜希代(北栄マスカット保育園)
神林 真里(函館大谷短期大学)
コーディネーター 増山由香里(札幌国際大学)

絵本を見て読む、さらに遊びとして楽しむ、またそれらを通して共有、共感の体験を積み人とのつながりを育むなど、保育現場での絵本の楽しみは多様である。本ラウンドテーブルでは話題提供をもとに、育児や保育、保育者養成の場で絵本をどう捉え、どのような広がりがあるのか、その楽しみや可能性について考察を深めることを目的とした。

〈話題提供1 藤田 春義氏「赤ちゃん絵本の深化」概要〉

産婦人科の育児教室で、母親の膝に座った子どもに絵本を読み、その絵本を贈るブックスタートを行っている。4、5ヶ月の赤ちゃんは読み手と絵本の両方を見て、集中して聴く。満1歳の子は初めて見る絵本の言葉を聞いて、体をそのように動かす。これらの様子を通して、赤ちゃんは母親の膝が一番安心することや、話しかけられることがわかる赤ちゃんの賢さ、また大人が子どもにどのような言葉をどれくらい語りかけているかの重要性を母親に伝え理解してもらう。



5年前から保育園版ブックスタートとして、月刊絵本を0歳児クラス全員に贈る取り組みを勧めている。平日は1対1で保育士と読み、週末に持ち帰り親子で読んで、月曜の朝園に戻す。それを月4回繰り返し、月末にその絵本を贈る取り組みだ。子どもと保育士が視線を合わせせる姿、子どもが声をあげ喜ぶ姿には子どもの言葉が溢れている。そしてこの様子を写真に撮り保護者へ贈り、子どもがこんな風に絵本を読み、楽しめることを伝える。別の園では、「どくしょのおと(ノート)」という取り組みを行い、保育士と保護者の間で子どもが本を大好きになっていく様子をやりとりする。

このように子どもが大好きな絵本によって、園と家庭が強く結びついていく。これが育児支援である。育児支援とは子どもが成長するだけでなく、家族と共に成長していくことが必要で、こうした取り組みがそのことを実現してくれる。取り組みは少しずつ増え、今では30園になった。今後多くの園で絵本を通じた育児支援が実践されることを願う。

〈話題提供2 遠藤 亜希代氏「想像世界の楽しみと子どもの表現遊び」概要〉

『からすのパンやさん』(加古里子)を繰り返し読むことで、次第に子どもたちが絵本のカラスになりきりはじめた頃、遠足にカラスからの手紙を用意した。公園で手紙と共にあったイーストとレシピを発見し、園に戻りパン作りをしたことで、近所のパン屋や公園で遭遇した食パンをくわえたカラスに絵本を重ね合わせて楽しむようになった。また『からすのてんぷらやさん』『からすのおかしやさん』を読むと、子どもと考えたお泊り会の夕飯は天ぷらに決定した。公園でカラスからの手紙を発見した後、頭上の電線にカラスが止まり、子どもたちは感謝の言葉を呼び大喜びした。その後、天ぷら屋さんとおかし屋さんのごっこ遊びが始まり、さらに、「ほねほねさん」シリーズ(にしむらあつこ)や、「へんてこもり」シリーズ(たかどのほうこ)によって、子どもたちの思考は思いがけないほど広がりを見せた。また12月の発表会は「からすのパンやさん」を題目として背景や道具作りなど得意分野を生かした準備を行い、クラスが協力して一体となった。

このような絵本と遊びを通した1年間の活動から、子どもが絵本から想像し、遊びを経て自分を表現する力が育つということを実感した。

〈話題提供3 神林 真里氏「笑顔いっぱいの子どもたちを思って私だけの手作り絵本」概要〉

本学の絵本に関連する授業は幼児美術、保育実習、保育内容表現など複数あるが、これらをリンクさせ卒業までの実践と子どもたちとの関わりの中で絵本を通して考察している。制作課題の手作り絵本は絵本が果たす役割や絵や言葉によって伝えることを重視し、手作りを通して心と体の発達段階や子どもの成長する環境としての地域性、遊びと作品の活用法について考えるよう指導している。寿司屋でアルバイトをしている学生による布絵本「おすしやさん」は寿司屋の多い函館ならではの作品であり、垣間見た子育て中の親子の姿から飽きずに遊べる絵本としての工夫も入っている。

保育者を志す者として、このように実習や授業で深めた学びから、さらに食育や色彩学習などを取り込み、耐久性や多様な活用法を考え、絵本を制作していった。その制作段階から、絵本と子ども達との関係性を考える保育者の目標をもって成長していくことが手作り絵本を課題とした授業である。

参加者の活動内容や話題提供者に意見を求める質問、感想などから意見が交わされ、子どもの気付きや発見に寄り添いながら、絵本の必要性を考え深めていくための良い機会となったラウンドテーブルであった。

(文責:吉川聰子、増山由香里)

ラウンドテーブルB

「いわさきちひろと武市八十雄の絵本づくり」

話題提供者 松本 猛(絵本学会会長・ちひろ美術館常任顧問)
武市 晴樹(至光社社長)
山口 恵子(北海道大学大学院博士課程)
コーディネーター 柴村 紀代(せいとく介護こども福祉専門学校)

ラウンドテーブルBは、今年生誕100年を迎える画家・いわさきちひろと、没後1年となる至光社の絵本制作者・武市八十雄を偲び、2人が目指した「感じる絵本」を解明しようと企画された。話題提供者として、いわさきちひろの長男・松本猛氏、武市八十雄の次男・武市晴樹氏、そして至光社が発行する月刊カトリック保育絵本『こどものせかい』を研究する山口恵子氏の3名から、それぞれ興味深い話を伺うことができた。

晴樹氏によると、いわさきちひろは1958年4月から『こどものせかい』に掲載を開始し、1974年3月号までに105の作品を発表している。その中でも、1968年に発表された『あめのひの おるすばん』は、「感じる絵本」を模索していた武市とちひろによる初めての絵本作品であり、それ以降、ちひろの絵本はちひろが亡くなるまで『こどものせかい』において毎年1冊ずつ発表され、至光社の「感じる絵本」の象徴的な作品群となつた。



武市八十雄が「感じる絵本」制作に取り組むことになった経緯については、晴樹氏と山口氏それ各自から話があった。武市八十雄は『こどものせかい』の前身である『ベビーダイジェスト』(光の友社事業団発行)の創刊時より制作に関わり、以後、至光社で絵本制作の仕事を続けることになるが、それは後に至光社初代社長となった母である武市君子を助けるためでもあった。当初は経営の面で危機的状況があり、ようやく事業が軌道に乗り始めたのは昭和30年代の終わり頃だった。また、絵本制作について素人であった武市は、様々な童画家や作家に教えを受けながら、絵本づくりを学んでいった。特に1960年代に、武市は絵本のあり方について模索していたことが幾つかの資料に書き残されている。それによると、武市は數学者・岡潔との交流やモンテッソーリ教育の知見、またアメリカで編集者のゾルトー女史から絵本を酷評されるという体験等を通して、「感じる絵本」制作への道を歩み始めるところとなつた。

その「感じる絵本」とは何かということについて、松本氏は『あめのひの おるすばん』や『ぼちの きた うみ』を例に解説し、当時の武市とちひろの制作秘話を語った。武市とちひろがいつも言っていたのは、「1冊の絵本で1枚の絵にしよう。組み立てていって、最後の全部の感覚が1つにまとまった時に、1枚の絵を見て素晴らしい絵を見た時のような豊かな感情が生まれればいい」というものだった。2人の絵本

づくりは、プロットは作るが、その間に様々な場面をある程度自由に描く。使われない場面も平気で描いていく。それは、映画のフィルムをたくさん撮つて編集するのに似ていると松本氏は指摘する。

武市八十雄は当時の編集者としては珍しく、絵描きに自由に描かせる人であった。ちひろにも、ある時からほとんど注文をつけなくなつた一方で、武市はちひろとの絵本づくりにおいて、意図的にちひろの絵を止めることができた。さらに上手に描けるものを敢えて止めるのであるが、ちひろはデッサン力が非常に高かつたため、絵が崩れることがなかった。松本氏は、2人が組んだ絵本づくりが成功した要因を3つ挙げられた。まず、もともと感性が響き合うところがあり、さらにもちひろが『こどものせかい』に多くの作品を描いて互いの気心が知れていたことに加えて、ちひろがデッサンの達人であったこともあるのではないかと考察されていた。制作過程において、ちひろは武市とディスカッションしながら多くの習作を描き、かつ武市と共に色の効果を様々に試したりなどして、いろいろな調整をしていった。

松本氏は、作品における水彩のじみの効果に着目し、武市とちひろが一緒に目指した絵本は、子どもの心理をどういう風に表現するかというところに中心を置いていると指摘する。「感じる絵本」は、子どもたちのストーリーを追いかけていく絵本というのに対して、そういうものを狙おうとしたところに大きな特徴がある。「微妙な子どもの心理、その中にある喜びや悲しみを表現する絵本」。これが「感じる絵本」のベースなのである。

以上のように、会場では武市八十雄の人物像や武市とちひろの「感じる絵本」づくりを中心に話が進められ、制作者の家族だからこそ知り得た貴重な話も伺うことができた。また、最後に晴樹氏からは現在の至光社の絵本制作がどのように行われているのかをお聞きし、武市とちひろの絵本づくりに見られた姿勢が今も受け継がれていることを知ることができた。今回の絵本学会大会のテーマは「多様化する絵本」であったが、1960年代に武市とちひろが「感じる絵本」を制作し、新しい芸術表現のジャンルとして絵本の可能性を示したことは、現在に至る多様性の先駆けであったのではないかと考えさせられた。

(文責:山口恵子)

ラウンドテーブルC

「ようこそ自然へ! 絵本画家が語る実体験としての自然」

話題提供者 あべ 弘士(絵本作家)

村上 康成(絵本作家・絵本学会理事)

コーディネーター 横田由紀子(札幌大谷大学短期大学部)

ラウンドテーブルCは、45名が入る教室に、予備の椅子を10脚ほど入れる盛況で始まった。あべさんと村上さんのお話を楽しみにきた人が多いだろうとの予測のもと、コーディネーターはなるべく口を挟まないように心がけ、お二人にもあらかじめそうお断りを入れて、次の2点を中心に進めた。

1.自己紹介を兼ね、自然との関わりについて(実体験としての自然について)

2.「えほん・椋鳩十」について

1. 実体験としての自然

村上さんは、子どもの頃、父と行った川でアマゴの群れと出会った話から、北海道での釣りへと繋げ、猿払でのイトウの話、朱鞠内湖のワカサギ釣りと、北海道にちなんだ釣りの話を披露した。北海道で出会ったのは魚だけではなく、オジロワシ、キタキツネ。釣りの際、横においておいたウゲイをキツネが盗み、そのウゲイを2羽のカラスが奪い取る様子。そこから話は沖縄の海へ行き、アメリカ(突然、足元の流れから現れたカワウソとお見合いに)、カナダ(1メートルのニジマスを釣り上げるために10年をかけたこと…5分後にはこれからどうするか絶望に落ちた)、ニュージーランド(ブラウントラウトを釣った)、そして話題は北海道へ戻り、藪をこぎ、蚊をつれて歩いた釣りのこと(蚊柱がたち、ヨタカが集まってきて蚊を食べ、宮沢賢治を思い出したこと)へと、まさに釣り人としての自然体験をたっぷり聞かせていただいた。

あべさんは、学会の次の週にカナダへ行く予定であることから話が始まり、立ち上がる動物を話題にした。動物はしつぽを支えにして、後ろ足と3点で立つ。その例として、カンガルー、カワウソをあげられた。また、ヒグマは後ろ足でたち、とても大きいと話す。ミーアキャット、プレーリードッグは見張り番のために立ち上がる。そして話題はアフリカへと続いた。ライオンのシリーズが生まれた背景として、興味深い話がいろいろ提供された。四方全部を見渡すと、四国を全部見ているほどの広大な光景、マーの群れ、あるいは、空の色の変化、雲が本当にすごい白であることなど、『ライオンのよいいちにち』(校成出版社)の画像を示しながらアフリカの自然について話した。その後、話題は動物へと戻り、アフリカゾウ、アフリカのウサギ(ライオンはウサギを捕らない)、シマウマ(縞が背景に対してどうなっているか…縦縞か横縞か)、ヒョウ(自分の木があり、そこで昼寝をする)など、興味深い話が続いた。実際のアフリカを見て気づいたことをあげ、行く前のアフリカの絵はうそだった、とも話された。

さらに村上さんが、モンゴルで遠くまで燃料となる焚を探して歩いた時の、足下から星がでている感覚について触ると、あべさんも、満点の星の中で野宿するとどちらが上か下かわからないと述べられた。現実を「嘘化」できる、超現実として表現が「絵」であると話された。

お二人の体験された自然は、私たちが目にする絵本の中に表現さ

れている。私たちはお二人の絵本から、それぞれが体験された自然を追体験して自分の中に取り入れているのだ、と実感した。

2.「えほん・椋鳩十」について

椋鳩十の絵本については、評価の高い児童文学として文章が出来上がっているところに、絵をつけることの難しさが語られた。村上さんは、「文章が出来上がっているのに、絵本にするというのは蛇足的になるのではないか」と悩んだという。だが、活字離れが言われる現在、絵本で文章を読むという意味で引き受けたそうだ。



あべさんは、動物を描く良い文章として言葉が選び取られている椋鳩十の作品の中で、文章として表現された「がん(雁)」が好きなので「よし、描くか」と引き受けたそうだ(あべさんは『大造じいさんとガン』に絵を描いた)。さらに村上さんが、絵本の画像をもとに『母ぐま子ぐま』で工夫されたところを説明され、既に完成された文章に絵を描くことの苦労の一端を私たちに垣間見せて下さった。

あべさんは、「他の人の文章を理解するまでに時間がかかるが、奮い立たせられるものも生まれる」という。自分で文も書き、絵も描くほうが楽なのだと笑いながら本音を話された後、「他の人の文章が絵を描く勇気を与えてくれるまで時間がかかるが、どこかでいつも考えていて、あるタイミングで産まれてくる瞬間の喜びや、難産の時に産む楽しさもある」と話された。

村上さんは、現実に生きている作家と絵本を作る場合、作家と良く話しながら絵を描いているそうだ。お互いの思いをぶつけることで、より良い作品ができるだろう。そこには、文章を作る者と絵を描く者との真剣で対等な思いがある。一冊の絵本が出来上がるまでの厳しさを、改めて考えさせられた。

ラウンドテーブルCは、コーディネーターの進行の拙さもあり、会場からの発言を受け付ける時間が無かった。そのことを反省すべき点として最後にあげたい。

(文責:横田由紀子)

企画委員会2018年上半期 報告

企画委員会は、2018年度上半期に2つの活動を行いました。

①「アンケート」実施

2018年7月~8月に会員を対象にアンケートを実施しました。回答数は87件でした。ご協力いただいたみなさま、ありがとうございました。結果の一部をご報告します。

<回答者の属性>

年代	人数	割合
10代	0	0.0%
20代	1	1.1%
30代	6	6.9%
40代	11	12.6%
50代	28	32.2%
60代	28	32.2%
70代~	10	11.5%
無回答	3	3.4%

地域	人数	割合
北海道	4	4.6%
東北	3	3.4%
関東	39	44.8%
北陸	0	0.0%
中部	15	17.2%
関西	16	18.4%
中国	1	1.1%
四国	4	4.6%
九州	4	4.6%
沖縄	0	0.0%
海外	0	0.0%
無回答	1	1.1%

会員歴	人数	割合
1年未満	7	8.0%
1~3年	10	11.5%
3~5年	11	12.6%
5~10年	17	19.5%
10~15年	11	12.6%
15~20年	8	9.2%
設立当初から	23	26.4%

今回のアンケートは、設立当初からの会員が多く回答してください、設立時の熱気あふれる様子を伝えてくださいました。また、今後の「絵本フォーラム」については、多くの方から、絵本作家をゲストにという要望が寄せられました。ヨシタケシンスケさん、降矢ななさん、みやこしあきこさん、くすのきしげのりさんのお名前が複数の会員からあがり、クリス・ヴァン・オールズバーグやイッシュトバン・バンニヤイなど海外の作家を招聘してほしい、また出版や編集に携わる方の話を聞きたいといったご意見もいただきました。

また、絵本が発展している今だからこそ改めて「絵本とは何か」「日本の絵本の源流」など、絵本学の原点をみつめたいという意見が複数の会員から届いた他、「バリアフリーの絵本」「絵本と子どもの発達や教育」「グラフィック・ノベルやデジタル絵本などと絵本の関係」など、今後取り上げてほしいテーマや話題について多くのアイディアをいただきました。

「東京以外でも開催してほしい」「同じテーマで各地を巡回してはどうか」「GWは避け、秋の開催だと参加しやすい」など、開催時期や場所に関するご提案や情報も書いていただきましたので、企画委員会だけではなく、理事会でも一部共有し、今後の活動に反映してまいります。

②意見交換会voice vol.0「2じのおちゃにきてください」開催
夏の名残のある2018年9月8日(土)14時から16時すぎまで、日本女子大学香雪館にて意見交換会voice vol.0「2じのおちゃにきてください」を開催しました。参加者は34名、そのうち会員は14名でした。

2部構成とし、第1部では、3グループに分かれて、事前に提出しあった「話し合いたいテーマ」や「絵本について気になっていること」をランダムに引き当てながら、情報や意見の交換をしました。



3グループそれぞれに違う展開となりましたが、「デジタル絵本」については全てのグループで話題になり、「絵本をデジタルにしたとき、それは絵本とは別の特徴、機能をもつものとして論じる必要があるのではないか」といった意見が示されたグループもありました。



第2部はお茶会をしました。絵本作家、司書、編集者、研究者、保育者、教員、学生など、さまざまな場で活躍している人たちが共にお菓子をいただきながら、情報交換をしたり、第1部の議論を深めたりしました。

参加者には、長野ヒデ子さんオリジナルデザインのvoice缶バッジvoice缶バッジのプレゼントもありました。長野さんが盛り上げてくださって、にぎやかで楽しい会となりました。初めて絵本学会の活動に参加なさった方からも、「またこのような機会があればぜひ参加したい」という、うれしい感想も届いています。参加してくださったみなさま、ありがとうございました。

絵本学会はここ数年厳しい財政が続いております。支出を抑えながら、絵本学会が魅力ある場として存続できるようにするには、理事や委員だけではなく、会員の方々の協力と知恵が必要です。絵本学会には交流したり、活動や研究の発表をしたり、情報を伝え合ったりできる、さまざまな機会や制度が設けられています。ぜひ積極的に活用していただき、運営にも力を貸してください。

なお現在、企画委員会は「絵本フォーラム」開催に向けて準備を進めています。多くの会員が参加したくなる活動となるよう努力してまいります。どうぞご期待ください。

(企画委員:今田由香)

2018年度研究助成審査 結果報告

協議の結果、下記の3件を採択しました。

・「聴覚障害児に絵本を楽しんでもらうために一手話をまじえた絵本読み普及に向けた実践研究―」

申請者：玉井智子（今治明徳短期大学幼児教育学科）

協 力：愛媛県手話通訳士会

・「島多代が遺した言葉と蒐集絵本の研究」

申 請 者：代表・前沢明枝

（翻訳家・日本国際児童図書評議会理事）

共同研究者：今井良朗（武蔵野美術大学名誉教授）

上野直子（ロシアの絵本カラーランダーシ代表）

みつじまちこ（翻訳家・東京子ども図書館／かつら文庫）

山下彩華（筑波大学人文社会科学研究所現代語・現代文化専攻博士後期課程）

・「絵本の読み方の相違による脳反応の変化—読み手と聞き手の相互作用について—」

申 請 者：代表・森慶子（徳島大学医学部保健学科・非常勤講師）
共同研究者：村中李依（ノートルダム清心女子大学）

「絵本フォーラム」開催のお知らせ

絵本フォーラム2018

「人生は回り舞台ーささめやゆきの幻燈紙芝居」

ゲスト：ささめや ゆきさん

日 時：2019年3月2日（土）14:00～16:00（予定）

場 所：鎌倉 稲村ガ崎 giogio factory

神奈川県鎌倉市稻村ガ崎3-6-41

<http://masamichiito.com/giogio.php>

定 員：45名

参加費：1,000円（当日払い）

申し込み方法：件名に「絵本フォーラム申し込み」、本文に、氏名と電話番号を記入の上、ehon-forum@seipy.comへお申し込みください。

問い合わせ：絵本学会 企画委員会 ehon-forum@seipy.com

*当日は床にお座りいただいての鑑賞となります。

*会場への問い合わせはご遠慮ください。

*詳細は、チラシおよび学会ホームページをご覧ください。



絵本学会 Who's who?

今号から、当学会の役員を会員の皆様に紹介するコーナーを設けました。その人物を良く知る人が執筆を担当します。まずは会長・澤田精一さんの紹介です。次号は事務局長の紹介となります。どうぞお楽しみに。

澤田さんについて 甲木善久

澤田さんは大きな人である。

身体が大きいだけでなく、

志が大きいのである。

澤田さんと知り合って既に三十余年の年月が経つのだが、その間、澤田さんの志は一貫していたように思う。彼にとって絵本というものは芸術作品であり、そう呼ぶにふさわしい作品を創りだすことと、それに見合う批評や研究が積み重ねられていくことを、常に求めて行動しているよう思えた。子どもたちを大いに喜ばせつつ、しかし、決して子供だましではない絵本を彼は模索し続けてきた。それはある種の冒険であったから、彼の編んだ絵本への評価は賛否両論がある。澤田さんの絵本への思いは、彼の著書『ひそませること／あべきたてること—絵本編集の現場から』（現代企画室）に詳しいから興味のある方は是非とも読んでいただきたい。

澤田さんは無私の人である。

傍で見ていて呆れるほど、

自分のことに頓着しない。

澤田さんが私欲のために動くのを目撃した記憶はない。その点では紛れもなく編集者なのだと思う。もちろん、編集者と呼ばれる仕事をしている人の中には、自己実現が目的の人もいる。作家の威を借りて、自分が偉くなったような気分を味わってしまう人もいる。自分の価値観や美意識に作家を從わせ、「あの作品は俺が創らせたんだ」などと言ってしまう人もいる。けれど、澤田さんは違うのだ。心優しい多くの素晴らしい編集者と同様に、作家に寄り添い、作家の持っている可能性を探り、作家の可動領域を広げ、新しい作品を生み出すことに心を砕く。だから、そういう人は、おのずと自分に頓着しなくなってくる。おそらく、今回、絵本学会の会長という大それたお役目を引き受けてしまったのも、そんな澤田さんの心根から出た行為なのだ。未だこの世に明確な姿を持たない「絵本学」というものを生み出すために、絵本学に寄り添い、絵本学の持っている可能性を探り、絵本学の可動領域を広げようとしているのだと思う。自分の名誉とか肩書とか、故郷に錦を飾りたいとか、利権とか、そんなケチな魂胆で会長職を引き受けたわけではないのである。それが証拠に、彼は会長に就任してからも服装を変えてくれない。トップに立つ者の威厳や威圧感がない。なんだか常に、自分よりも偉いものに仕えているような佇まいがある。ぼくは、彼が何に仕えているのか知っている。澤田さんは、絵本の中に現れる芸術の女神に仕えているのである。

澤田さんはシャイな人である。

あの大きな身体に似合わず、

とってもシャイな人である。

だから、時として、人に誤解を与えてしまう。

うつかりポケットに手を突っ込んだまま人と話してしまうのも、薄笑いを浮かべながらムニヤムニヤと受け答えしているように見える瞬間も、

あれは激しく照れているのである。

動搖しているのである。

困っているのである。

そう、しかし、哀しいかな澤田さんの身体は大きい。

本人は、それほど大きな身体だと自覚していないように思えるから困るのだが、あれは決して尊大に振る舞っているわけではないのである。もしもそんなふうに見えてしまう瞬間に居合わせてしまったら、どうか名作『ぐるんぱのようちえん』を思い出してください。澤田さんの中には、ぐるんぱが住んでるだけなのである。

澤田さんは福音館書店の編集者だった。

ちょっと変わった福音館の社員だったと言う人もいる。

毛色の変わった絵本ばかり作ったと言う人もいる。

もちろん、ぼくもそうした見方をする人を否定するつもりはない。そんな見方もあるのだと思う。けれど、ぼくには、澤田さんは生粋の福音館書店編集者であるように見えてしまう。福音館書店のDNAを濃厚に受け継いだ編集者なのだと想えてしまう。

読者の皆様にはことさらに説明するまでもないことなのだが、福音館書店の作品群が我が国の絵本文化に対して果たした役割はとてもなく大きいものである。世界に誇れる素晴らしい絵本文化を私たちが持つことができたのは、多くの出版社と、作家と、編集者と、印刷所と、製本所と、取次と、書店と、図書館と、幼稚園と、保育園と、学校と、そして読者の力だが、なかでも、福音館書店の果たした役割の大きさはご承知の通りである。

今となっては、福音館書店の絵本は定番でありスタンダードであり、多くの古典的ロングセラーを有しているように見えるだろう。とはいえ、それらの古典作品は、当初アバンギャルドだったのである。戦争に負けた後の日本において、子供たちに手渡すべき新しい絵本を輸入（翻訳）に頼ることなく創作しようとした開拓者精神は、他業種からの新しい表現を取り込んだ。福音館書店の古典作品は、そうした新しい試みの積み重ねによって出来たのである。松居直さんや堀内誠一さんを始めとした創成期の編集者、作家の方々は、既に在るものとなぞろうとするのではなく、未だ見ぬものを手繰り寄せながら絵本という表現を模索していたのだと思う。そして、そうした努力が実を結び、福音館書店は絵本の王道となっていましたのだ。だが、その出来上がった福音館書店に高倍率を勝ち抜いて入社できた編集者の多くは、もはや開拓者ではない。広大な豊かな畑で、既に設計された「良い絵本」を栽培すればよいのである（もちろん、そこで収穫された実りは多い）。そんな中にあって、敢えて他業種の作家に声をかけ、斬新な実験を試みる編集者は、變人に見えるだろう。豊かな実りのある畑が既に在るにもかかわらず、未だ開墾の手を休めないのである。「絵本は表現です。表現は生きています。だから動きます」という会長あいさつのタイトルを、ぼくはそんなふうに読み取った。

澤田さんは、二十余年の歴史を刻んだ絵本学会の既に出来上がったかに見える枠組みの中で安穩と会長になったのではない。

絵本と絵本学の未来を開拓するために会長を引き受けたのである。

澤田会長のことを、どうぞよろしくお願ひします。

新入会員の自己紹介コーナー

安部 貴洋 (山形県立米沢栄養大学)

山形県立米沢栄養大学の安部貴洋と申します。もともとはアメリカの哲学者、教育思想家ジョン・デューイの教育思想を中心に研究を行ってきました。科学時代における哲学と教育のあり方をデューイの思想を通して考察してきました。また、現在は戦前の東北地方を中心とした北方性教育運動の研究を中心に行っています。子どもの綴方を通して東北の地に根ざした教育を展開しようとした教師たちの運動を考察しています。絵本に関しては、もともと興味があったのですが、現勤務校で卒業研究を担当することになったのをきっかけに絵本の研究に取り組むことになりました。食育の導入として用いられることが多い絵本ですが、そもそも絵本とは何か、子どもが絵本を読むとはどのようなことなのか、そのような問を食との関わりで考察していくたいと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

上野 直子

カラソダーシという名前でロシア絵本の出版、原書の通信販売などを手掛けている。今までにラヂオ画民話絵本「うさぎのいえ」、マーヴィナ画「わいわいきのこのおいわいかい」という2冊の翻訳絵本、そしてオリジナル絵本「セリヨージヤとあそぼう!」を出版している。またカラソダーシのサイトでは様々なロシア原書絵本の紹介・販売をしており、毎週末にはオープンルーム活動も行っている。

かつてロシア絵本に出合った、その芸術性に感動し、社会的背景との関連性などに興味を抱いたことが上記のような活動に繋がっていったのであるが、その活動の前提として歴史や作家、作品への探求があることがカラソダーシの本来。それについては誠に拙いながらも取り組んできた。

本学会は、故島多代さんについての研究会の中で紹介いただきました。ご指導いただきながら、絵本に真摯に向き合い、研鑽に努めたいとの思いで入会させていただいた。

大河原 悠哉

みなさん、はじめまして。この度絵本学会に入会しました、大河原悠哉と言います。普段は幼稚園教諭として、幼児と関わる中で絵本を楽しんでいます。また、平成29年6月に独立行政法人国際青少年教育振興機構による「絵本専門士」を取得しました。休日は、子育て支援センターや図書館、本屋などでおはなし会や保育者・保護者向けの絵本講座を開催しています。絵本学会に入会するにあたり、様々な絵本の実践や研究に触れ、絵本の専門性を高めていけたらと考えています。たくさんの方に絵本の魅力や面白さを伝えられるように努めています。たくさんの方に絵本の魅力や面白さを伝えられるように努めています。どうぞよろしくお願ひ致します。

小屋 美香 (育英短期大学保育学科准教授)

この度、絵本学会に仲間入りをさせていただきました小屋美香と申します。群馬県内の保育者養成校に勤務し、専門は乳児保育・保育実習指導・子育て支援関連です。保育者を目指す学生たちに、いつの頃からか、毎回授業の初めや合間に絵本を2冊ずつ紹介するということを続けてまいりました。大体は、私自身が自分の子どもたちと読みあいを楽しんだ絵本です。絵本についての歴史に気づき、その時の

かけがえのない記憶も蘇ります。後で学生から「あの本、私も大好きでした」「読んでもらった本、買いました」という声を聞くと、絵本を介した学生との繋がりを感じ、また嬉しい気持ちになります。好きな絵本についてもっと知りたい、そう思って今年は絵本専門士の養成講座も受講しています。足を踏み入れた絵本の世界は想像以上に奥が深かった、この広く魅力的な世界で研究も愉しみたい、そして絵本学会の扉に行き着いた次第です。どうぞよろしくお願ひいたします。

沢崎 友美

はじめまして、沢崎友美と申します。白百合女子大学大学院児童文学専攻修了後、同大児童文化研究センターの研究員として籍を置き、主に現代日本児童文学やYA文学、読者論や物語論を研究対象としていましたが、出産を機に、絵本にも関心領域を広げるようになりました。現在は公共図書館で司書として働いており、図書館学や児童サービスについてもさらに学んでいきたいと考えています。2016年より、第2期絵本専門士(荻野友美名義)としても活動。児童文学における論文は、「原発問題に挑む児童文学から〈物語の力〉を探る―たつみや章『夜の神話』を中心に―」(『児童文学研究45』2012年12月)、「自己物語論」の視点から児童文学を読む―〈読みかえの物語〉としての『西の魔女が死んだ』を中心に―」(『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集 XII』2009年3月)など。どうぞよろしくお願ひいたします。

堀内 古季

絵本と私

はじめまして、堀内古季(こずえ)と申します。私の絵本との関わりは、児童文学を専攻した大学時代に遡ります。研究者や作家から直接子どもの本に関する知識、児童サービスを学び、今考えると贅沢な時間を過ごしました。大阪府立国際児童文学館を訪ね、科学絵本について卒業論文を書いたのは忘れない思い出です。

卒業後、公共図書館3館に計10年間勤務し、読み聞かせなども実践。現職の大学図書館では、アートとしての絵本を楽しんでいます。

このように学生時代、公共図書館、大学図書館と3つの場所で絵本と共に過ごしてきました。今後も司書の視点から、この多面的で奥深い資料を探求したいと思っています。よろしくお願ひします。

静岡文化芸術大学図書館・情報センター、日本図書館協会認定司書静岡大学情報学研究科修了(情報学修士)

資格:司書、司書教諭、小学校教員免許、学芸員
お宝絵本:田中豊美『ネコ』

山崎 あづさ

安曇野ちひろ美術館勤務を経て、Universitat Autònoma de Barcelona(バルセロナ自治大学)にてMáster en Libros y Literatura para Niños y Jóvenes(「子どものための本と文学」修士課程)を修了しました。主にスペイン語圏→日本語の絵本の翻訳と翻訳絵本全般が研究対象です。今後、少しずつ、研究を進めていこうと思っています。どうぞ、よろしくお願ひいたします。

絵本学会理事会 報告

◎2018年度絵本学会第2回理事会 議事録

日 時:2018年6月24日(日)14:00~17:30

会 場:日本女子大学(新泉山館)4階 児童学科会議室

出 席:澤田精一(会長) 松本育子(事務局長) 生田美秋

今田由香 甲木善久 佐々木由美子 鈴木穂波

長野麻子 藤本朝巳 丸尾美保 甲斐聖子(事務局補助)

◆ 報告事項

1. 会長より

澤田会長より、第2回理事会にあたり挨拶がなされた。

2. 前回2018年度新旧合同絵本学会理事会議事録および総会議事録の確認

承認された。総会議事録に関しては例年に併せて体裁を整えることとなつた。

3. 各委員会報告

①企画委員会

今田理事(委員長)より、和田前理事(前委員長)から、引き継ぎがなされた旨報告があつた。

②紀要編集委員会

鈴木理事(委員長)より、永田前理事(前委員長)から、引き継ぎがなされた旨報告があつた。

③機関誌編集委員会

藤本理事(委員長)より、生田理事(前委員長)から、引き継ぎがなされた旨報告があつた。

④研究委員会

丸尾理事(委員長)より、本庄前理事(前委員長)が作成した書類をもとに、松本理事(委員・事務局長)を経由して、引き継ぎがなされた旨報告があつた。

⑤広報委員会

佐々木理事(委員長)より、佐藤前理事(前委員長)から、引き継ぎがなされた旨報告があつた。

4. 事務局より

前事務局との引き継ぎは7月7日に行われる旨報告があつた。ただし、①事務局のメールに関しては、取得済みであること。②事務局の連絡先を記載した封筒を作成し、BOOKENDが届き次第、初回の発送を7月上旬に予定していること。③入会案内(村上康成デザイン)に関しても、事務局の連絡先を変えたものを作成し、各フォーラムや研究会で配布できるよう2,000枚程度印刷する予定であることが伝えられた。

5. 「フォーラム 子どもたちの未来のために」について

7月19日(木)に松本猛氏による「ちひろが描いた戦争と平和」(於文京区シビックセンター)が開催される旨が報告された。

6. 第21回絵本学会大会(2018年度)について

松本事務局長より、第21回絵本学会大会については、札幌大谷大学短期大学部に於いて6月2日および3日にわたって開催され、無事終了したことが伝えられた。実行委員会の報告は、NEWSに第一弾を

掲載予定であり、次回理事会で大会報告(内容と収支)を頂くことが確認された。

7. その他

特になし

◆ 審議事項

1. 入退会者の承認(敬称略)(6月2日~6月24日)

・入会者:大西洋 計1名

2. 事務局より

①後援依頼があり、慣例にならい以下1件の事業後援を行うこととなつた。

★今治市大三島美術館 企画展「国際児童文学館藏 絵本原画展~梶山俊夫、茂田井武、ほか~」
(2018年9月15日~2018年12月2日)

②理事会開催日程について

資料に基づき検討がなされた結果、以下のように決定した。

第3回 9月29日(土)13:30~(於日本女子大学目白キャンパス)

第4回 12月9日(日)13:30~(於日本女子大学目白キャンパス)

第5回に関しては、2019年3月を予定

*今後、理事会開始時間に関しては、13:30とする。

③特別委員会に関する会則変更の周知について

前回総会において、特別委員会が第9条の専門委員に加わることの承認を受け、次回の絵本学会NEWSで会則変更について記載し、そのほか、名簿発行のタイミングで会則を改めたものを配布し、ホームページも今後訂正することとなつた。

④会員名簿に関する

会員名簿に関して意見交換がされたが、事務局引き継ぎ前ということもあり、次回理事会で継続審議となつた。

3. 各委員会より

①企画委員会

今田理事より、資料を基に企画委員会の3年間の活動方針と、2018年度の活動計画として、①会員アンケートの実施(7月上旬発送予定)②意見交換会「絵本学会voice vol.0」の開催(2018年9月8日於日本女子大学目白キャンパス予定)③絵本フォーラムの開催(2019年上旬予定)を予定している旨説明がなされ、承認された。

②紀要編集委員会

鈴木理事より、紀要「絵本学第21号」について、①予算の関係から、印刷会社の見直しを検討中。②発行時期については、予算やスケジュールの見直しなどを行い、可能な範囲で少しでも早く会員の手元に届けられる方法を検討中。③査読の基準に関する項目や、紀要の執筆要項については、紀要内に記載することを検討中。④目録の扱い手については継続して探すこと。次号のNEWSには、投稿論文に関するお知らせの項目に投稿時の注意事項を加えて掲載すること。などの検討事項について説明がなされた。

③機関誌編集委員会

藤本理事より、「絵本 BOOKEND 2019」について企画案は、次期理事会時に報告予定であること。また、すでに承認されている委員の3名のほかに、機関誌編集の仕事を手伝う協力委員の方を2名ほど依頼する予定である旨、説明がなされ承認された。

④研究委員会

丸尾理事より、2018年度の活動計画が伝えられた。研究助成については、応募申請要項および、申請書の変更点について説明がされ、検討されたのち承認された。会員へは、次回絵本学会NEWSほかで周知される旨が伝えられた。

⑤広報委員会

佐々木理事より、絵本学会NEWSに関して、編集方針と61号、62号、63号の企画案について、資料に基づき説明がなされた。新企画として①絵本学会who's who ②新入会員自己紹介コーナー③編集後記の新設や若手作家へのカットの依頼などの計画が話され、構成についても承認された。

4. 特別委員会について

以下の通り、特別委員会メンバーを選任した。

生田美秋理事（委員長）、澤田精一會長、丸尾美保理事、甲木善久理事
以下の通り、最終選考委員メンバーを選任した。

澤田精一會長、生田美秋理事、*今井良朗氏（留任）、*佐々木宏子氏、*香曾我部秀幸氏、*川端誠氏 *に関しては澤田會長より交渉予定。

尚、査読に関するチェックリストの内容や、任期など検討事項については、本庄前理事（前委員長）と生田理事が引き継ぎをする必要があることが確認された。

5. 日本学術会議協力学会研究団体への登録について

佐藤前理事の後任として、藤本理事が担当窓口として選任された。

6. 第22回絵本学会大会（2019年度）について

次年度絵本学会大会について、日程の候補として6月1日・2日を検討していることが伝えられた。担当窓口として、和田前理事が協力委員となっており、以下の通り、担当理事が選任された。

生田美秋理事、松本育子事務局長

7. 絵本学会20周年記念事業について

絵本学会20周年記念事業について、澤田會長より説明があった。

8. その他

・絵本学会の財政について

絵本学会の財政について話題になり、内容については継続審議となつた。

・理事の旅費規程について

理事会出席に関する旅費規程について、見直しを検討することとなつた。

・第23回絵本学会大会開催地について

藤本理事より、次々回第23回大会を熊本県南阿蘇で開催希望していることが話され、今後検討することとなつた。

・絵本学会会則の改定について

会則準備担当として、藤本理事が選任された。

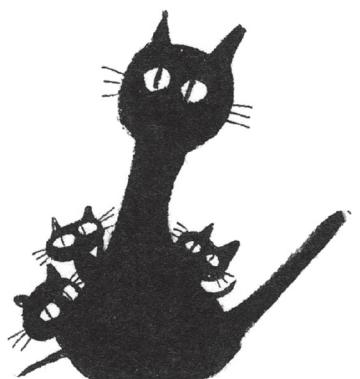
編集後記

・今号は、研究大会や意見交換会voiceの報告をはじめ、新たなコーナーも登場し、盛りだくさんの内容になりました。執筆してくださった皆様、そしてかわいいイラストを書いてくださった山田白百合さん、本当にありがとうございました。みなさんに楽しんで読んでいただけたら幸いです。(佐々木由美子)

・来年の手帖を開いて6月1日（土）、2日（日）に赤く○印を付け、絵本学会大会出席と書き入れてください。ついでに研究発表、作品発表を申し込みましょう。しかし、このボリュームでは編集後記まで読んでいただけるか心配です。編集長！編集後記読んだら得をする仕掛けを考えませんか。ひとの顔の見える、体温の伝わるニュースになったかな？(生田美秋)

・今号から新しく会員になられた方の自己紹介のコーナーができました。ご執筆して下さいました皆様ありがとうございます。また、役員の他自己紹介コーナーも出来ました。まずは会長のご紹介を僭越ながら私がさせていただきました。読者の皆様に楽しんでいただければ幸いです。(甲木善久)

・皆様のご活動やお力添えがあって、ちょっと新鮮なNEWSがきました。大切なこと、学ぶこと、かわいいこと素敵なことがたくさんのNEWSです。次号もどうぞよろしくお願ひいたします。そして、ぜひお楽しみに。(宮崎詞美)



イラスト：山田白百合